

閉会の挨拶(東京大会「世界のなかの沖縄」)

著者	中俣 均
雑誌名	沖縄文化研究
巻	25
ページ	281-285
発行年	1999-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/00015858

《閉会の挨拶》

法政大学沖縄文化研究所所長 中 俣 均

パネラーの皆さま、どうもありがとうございました。きょうの東京大会に関しましては、司会のお二人に締めくくっていただきました。これで東京大会は終わりになりますが、同時にこれは国際連続シンポジウムでもありまして、その全体の終わりでもあります。それにあたって、私のほうからひとことごあいさつをさせていただきます。申し遅れましたが、私は今年度沖縄文化研究所の所長を務めております中俣と申します。

本日は、ほんとうに大勢の方々に国際シンポジウムにご出席いただきまして、ありがとうございました。十一月二十八日に那覇市で「アジアのなかの琉球」というテーマで、シンポジウム沖縄大会を開催いたしました。その成果、それから本日のパネラーの皆さまによる講演、議論を、研究所の紀要であります『沖縄文化研究』二五号（来春刊行）集大成してドキュメントとして残すつもりであります。もし、内容等にご関心のある方は研究所にお問い合わせいただければ幸いです。

今回の国際シンポジウム開催の一つのきっかけと申しますのは、沖縄返還から四半世紀が経過しま

して、米軍占領当時から本土返還前後までの生々しい政治的状況を記した外交文書がアメリカで公開されるようになった。それをきっかけに戦後沖縄の歴史が大幅に書き換えられるべきなのではないかという問題意識が、本日のシンポジウムのコーディネートをされた鈴木佑司教授、それから沖縄文化研究所の元所長でありました比嘉実さんのお二人の間で共有されたということであつたと思います。

同時に、戦後から現代にかけて、沖縄が抱え続けてきましたさまざまな問題の根が、近世期琉球国の成立と展開の再検討、そこに求められるはずだという認識でも、ご両者一致しておられたように思います。

たとえば沖縄大会で、本日もここにおいでの高良倉吉教授のリードのもとで、琉球国の主体性というテーマで議論が交わされました。それなども、沖縄といわゆる日本本土（「ヤマト」）との複雑な関係について、近世琉球国以来のありようを整理したうえでないと、正しく把握はできないということを如実に示しているものだったかと思います。

それから、連続シンポジウムで近世期と第二次大戦後を取り上げることについては、時間的に不連続ではないかというご指摘も聞こえてまいりましたが、ただいま申しましたように、現在の沖縄を考える際に、この二つの時期の検討は欠かすことができないものであるということ。それから、近世期琉球国および戦後沖縄、この二つの時期は近年の沖縄研究において最もめざましい研究の進展を見た領域でありますこと。これらを意図して、私どもはこのシンポジウムを計画したわけであります。

さて、本土における沖縄研究は、柳田国男がいわゆる『海南小記』の旅に出かけ、沖縄で伊波普猷に邂逅した、すなわち一九二〇年ごろをもって嚆矢とするというのが定説のようであります。その柳田は、それに先立つ一〇年ほど前、一九一〇年に新渡戸稲造や牧口常三郎、小田内通敏らと郷土会という組織を結成しています。この背景になりましたのは、十八世紀末から十九世紀の初頭にかけてヨーロッパで盛んになりました郷土学、すなわち郷土を再認識し、土地と人との結びつきを強化するということを志す学問でありました。

時の社会が近代化や工業化に突き進むなどして大きく変化をいたしますときには、社会の価値としては、たとえばきょう議論にありましたような国家といった普遍的なものが重要視されることになります。そうした普遍性の追究が極限に達しますと、逆にその反動で、個別具体的なもの、身近なものへとわれわれの目が向くわけです。これは近代ヨーロッパに限らず、どこでも繰り返されてきたことであります。近年の日本における、いわゆる地域主義と申しますものなども、まさしくこれと同じ傾向にあるものと言つてよろしいかと思えます。

柳田らは郷土会を結成して、郷土研究を奨励したわけですが、むしろそれは後に主に民俗学、フォークロアと呼ばれることになる分野についてのものでありましたが、郷土を研究するのではなく、郷土で研究するのだということを強調しました。個別具体的なものを追究しながら、それだけではない、そこにとどまらない普遍性をめざす。普遍性を追究しながら、個別具体的な話に沈潜する。

その間の往復運動というわけですが、これは現在の私たちにとっても非常に重要な意味を持つものだと思います。

法政大学沖縄文化研究所は、沖縄の本土復帰と同じ一九七二年に設立されました。したがって、復帰後の沖縄と四半世紀の歩みを共にしてきたということになります。まさに個別具体的な一地域の研究所が法政大学に存在する、存在してきたということの意味について、私たちはそのカギは先ほどご紹介した柳田の言にあるように思っております。

つまり、沖縄を研究するのではない。それだけではない。沖縄で研究するということになるかと思えます。むろん、私たちはあくまでも沖縄に着目し続けたいと考えております。沖縄に足場を置いて、沖縄に着目し続けるなかから、普遍的な問題を考えていく。ローカルな地域研究を、まさにきょうのタイトルでもあります。グローバルな視野へ開いていく。

こういう方針のもとで、本年四月に新しく専任所員として着任されました吉成直樹さんを中心に、来るべき二十一世紀の新しい地域研究、新しい沖縄文化研究を開拓してまいりたいと考えております。本日お集まりの方々にも、ぜひとも法政大学沖縄文化研究所のためにさらなるご協力、ご鞭撻をお願いする次第です。

本日は、師走の初日というお忙しいなかであります。このシンポジウムにわざわざご来席いただきまして、まことにありがとうございます。これをもってシンポジウムの終了とさせていただきます。

す。